「2005 年 フィールド学習会雲南の棚田と民俗を訪ねて」ノート

春山　正樹

はじめに

ＮＰＯ法人野外調査研究所が、2005 年に初めて海外で行ったフィールド学習会「雲南の棚田と民俗を訪ねて」に参加した際のフィールドノートを帰国後すぐに書き写したものである。翌年に第 2 回が行われ（小生は不参加）、その成果の一部は「野外調査所報告 11」（2006 年 11 月 30 日）に報告されているが、全体的な報告書は未刊である。これは、その第 1 回の雲南調査行の記録である。

1. 旅程

2005 年（平成 17 年）4 月 12 日（火）～17 日（日）

4 月 12 日（火）	10 時	日本航空（JL603 便）にて出発
	14 時	中国　広州白雲空港着、時差は－1 時間
	16 時	広州市内の西漢南越王博物館へ、張炳興研究員の解説で見学
	18 時　40 分	中国東方航空（ＭＵ5738 便）にて広州を出発
	20 時　50 分	昆明に到着
13 日（水）	10 時　40 分	中国東方航空（ＭＵ2467 便）にて西双版納へ出発
	11 時　30 分	西双版納州景洪市に到着、現地ガイドはタイ族の李さん
	13 時	瀾滄江（メコン川）大橋の際でバスを降り、水かけ祭の河原へ
	30 分	「高昇」の打ち上げが始まる。 本部テントにて雲南省西双版納州民族宗教局長 岩香宰氏に放高昇の話を聞き、龍勢の報告書を贈る
	14 時　50 分	「高昇」のテントを出発し、龍船・闘鶏場などを見る
	16 時　30 分	民族風情園に到着し、見学
	18 時　20 分	民族舞踊のレストランにて、雲南省西双版納州州旅游局主任 常芹氏に面談
	20 時　頃	近くの工芸品マーケットを歩く
	22 時　40 分	景洪空港発　中国東方航空（ＭＵ5902 便）
	23 時　30 分	昆明空港に到着
14 日（木）	9 時　30 分	雲南省博物館へ、王さんの案内で見学。龍勢の報告書を贈る
	11 時　25 分	博物館をバスにて出発 元陽まで 380ｋｍ
	13 時　45 分	呈貢のガソリンスタンドで昼食後、元陽へ
		玉溪、通海、建水、个旧（錫の町）を通過
	19 時　30 分	元陽の新市街　南沙の入る
	20 時　35 分	元陽の旧市街　新街のホテル「雲梯大酒店」に到着
15 日（金）	9 時　10 分	ハニ族の菁口民俗村へ、ハニ族文化物館の盧朝貴館長から歓迎を受ける

	11 時　45 分	ハニ族の村を出て、ホテルにて昼食
	13 時　50 分	勝村の壩達（パーダン）の棚田の展望台に到着、棚田を望む
	15 時　15 分	モンピンの展望台へ　イ族の子供たちと遊ぶ
	16 時　25 分	霧に見え隠れする棚田を見た後、展望台を出る
16 日（土）	8 時　30 分	元陽のホテルからバスにて出発
	12 時　20 分	南沙、个旧を経て開遠に入り、昼食
	16 時　20 分	弥勒を通過し、石林に到着
	17 時　40 分	石林を見学して、出発
	19 時	昆明のホテル「錦江大酒店」へ到着し、過橋米線の夕食
17 日（日）	8 時　25 分	朝食後ホテルを出発、昆明空港へ
	9 時　45 分	中国南方航空（ＣＺ3478 便）にて広州へ
	11 時　20 分	広州へ到着
	15 時　30 分	日本航空（JL604 便）にて中国を離れる
	20 時　10 分	成田空港に帰着後、解散

2. 参加メンバー

吉川　國男	ＮＰＯ法人野外調査研究所　理事長
加藤　裕美	京都大学大学院
久保　朝一	ＮＰＯ法人野外調査研究所　会員
田中　長光	ＮＰＯ法人野外調査研究所　会員
中島　利治	ＮＰＯ法人野外調査研究所　会員
保科　義憲	ＮＰＯ法人野外調査研究所　会員
山岸　清子	日中旅行社
春山　正樹	ＮＰＯ法人野外調査研究所　会員

3. 旅の記録

＜４月１２日＞

広州へ

４月１２日火曜日、満開を誇っていた桜花を散らした前日の冷たい雨もあがった朝、８時過ぎには成田空港に吉川団長以下８名全員が集合した。広州行のＪＡＬ６０３便に乗り込み、定刻１０時に成田空港を出発した。前週末に北京で起った反日デモが広州などの地方へも拡がっているとのテレビニュースがちょっと気になるが、小生にとっては雲南は初めての地、中国へも数えてみれば２１年ぶりとなるので、どんなことに巡りあえるか期待が膨らんだ。機内はほぼ満席、反日デモの影響は感じられない。時計を１時間戻し現地時間に合わせる。外は厚い雲に覆われているが、飛行は順調で長崎県の福江市上空から、東シナ海を渡り、上海を過ぎて１４時（日本時間で１５時）には広州白雲空港に到着した。

空港の入国審査場は長蛇の列、外へ出るのに１時間余もかかってしまった。広州のガイドの崔さんに迎えられる。天井が高く、大きなガラスをふんだんに使った明るい空港で、前年８月５日に完成したばかりである。崔さんによれば「中国一大きい」とのこと、まだ

周囲では付属施設の建設が続いている。乗り換えの待ち合わせが５時間あるので一度広州市内へ出てみたいと希望していた。新空港は市街地から遠く、帰りの渋滞も懸念されるとのことであったが、乗り換え便のチェックインを済ませて、１５時２０分バスで市内へ向けて出発する。空は曇天、今にも降りだしそうであった。

広州は人口１２００万人の大都市である。高速度道路を少し走り市街地に近づくと道路の両脇に新しいマンションが林立している。バスの中で日本円１万円を７２０元に両替する。ガイドの崔さんが中国の物価の話をしてくれる、１００ｍ^{2}ばかりのマンションが日本円で６００～９００万円、賃貸の場合は月の家賃は１万円、食料品は極めて安い。一般の勤労者の平均的な賃金は月額１万２千円～１万５千円程度であるが、近年は貧富の差が大きくなり、近郊に土地やマンションを何棟も持つ人は莫大な収入があるとのことであった。

西漢南越王博物館

４０分程で市街地に入り西漢南越王博物館に着く。京都大学に留学経験のある張炳興研究員が流暢な日本語で解説してくれる。ここは１９８３年に発見された南越国の２代目の王文帝の墓の跡に建てられた新しい博物館である。博物館の中心部に王墓が保存されている。一辺が１０ｍを超える大きな石室が見える。墳丘をもたない地下式の石室墓とのことである。墓はまったく盗掘を受けずに発見され、世界遺産に申請中との説明。大都市の繁華街で見つかった遺跡が良く残されているものである。

石室から発見された人骨が４０代の男性で、「文帝行璽」の印面を持つ龍頭の金印が発見されたことから文帝の墓であると確認された。展示されている糸縷玉衣などの副葬品が素晴らしい、時間が無くて素通りするだけしかできないのが恨めしい。さらにこの時、特別展として展示されていた明の太祖、朱元章がこの地方に封じた３人の息子たちの墓から出土した副葬品を見る。金をベースにした金属工芸品や青花・青磁などの磁器が素晴らしい。ここも大急ぎで過ぎてゆく。冒頭に張さんの「この博物館を一通り見るには１日かかりますよ。」との言が身にしみる。あれもこれもゆっくり見たい、また来てみたいとの思いは残ったが、「さすが中国。」と充実した内容に一同は大満足である。

最後に博物館の一角で黒檀の展示ケースに入った清時代の磁器などの工芸品を１ケース丸ごと２３０万円で売りますが如何ですかとのお誘いにびっくりしてバスに乗る。１７時に博物館を出る、小雨が降りだしていた。街には心配された反日デモの陰も見えない。平日の夕方のラッシュの渋滞に巻き込まれるが、何とか高速道路にたどり着き、１７時４０分には空港に戻った。小雨が雨に変わった夕暮れ近く、崔さんに見送られ再び機上に、中国東方航空ＭＵ５７３８便にて１８時４０分に昆明に向けて飛び立った。

昆明到着

元陽の棚田の写真が載った「元阻梯田甲天下」（元陽の棚田は天下一）と大きな記事が機内誌に掲載されていて、中国でも棚田が注目されていることを知り、元陽の棚田の景観への期待がいっそう高まる。２０時５０分昆明空港に着陸、ガイドの高躋峰さんが迎えてくれる。高さんは２８歳の長身の好青年で、これから最終日に昆明を離れるまでお世話に

なる。昆明には雨はなかったが気温は１０Ｃ°ほどと肌寒い。ホテルへ向かう途中、レストランへ立ち寄る。軽食と聞いていたが本格的な中華料理である。少し前に機内食を食べたばかりで、この日４食目であるが、不思議と皆の箸がすすむ。２２時２０分に宿泊先の錦江大酒店に到着し、１０階の部屋に荷を解いた。昆明駅にも近いメインストリートに面した近代的な高層ビルのホテルである。日本時間では夜の１１時２０分、早朝に家を出ているので長い１日であった。

＜４月１３日＞

西双版納（シーサンパンナ）へ

翌１３日水曜日、朝からよく晴れている。朝食後９時２０分にホテルのロビーに集合、今日は西双版納（シーサンパンナ）への日帰りの旅である。水かけ祭りで、水をかけられるかもしれないからと濡れても大丈夫なように装備をして空港に向かう。雲南省は２０００年の調査では人口４５００万人、少数民族の祭りの多いこの時期、４月１０日から「雲南省観光祭」を開催していた。観光が雲南の重要な経済資源になっているのであろう。昆明市は雲南省の省都で海抜１８９０ｍの高地にあり、日本の陸上選手の高地トレーニングの地としても知られている。この日の気温は１５～１６Ｃ°、真夏向きの服装ではやや涼しく感じる。

昆明では新空港が計画され、２００８年に完成すると市街地から４０ｋｍと遠くなる予定とのことであるが、今の空港は市街に近く１０数分で行ける。空港にはお茶の売店が並んでいる。この地のプアール茶は日本でも近年は健康茶として有名になっているが、この雲南は茶の原産地と言われている。茶葉を炒って風を通し、型に嵌めて固めた固形茶がたくさん並んでいる。貨幣の形でおめでたい文字が浮き出ているものが多い。「削って飲むの？」と聞くと、「飾っておくものだ。」との返事であった。でもあの磚茶も同様なものであろう。

１０時４０分、中国東方航空（ＭＵ２４６７便）にて出発、西双版納までは陸路では７００㎞と言うが、空路では南西方向へ４００㎞ばかりである。約４０分で西双版納タイ族自治州の州都の景洪市に到着する。ここはもうビルマ国境まで数十ｋｍの亜熱帯の街である。ガイドに高さんによれば、人口は９９万人、その１／３がタイ族、１／３は漢族、残りの１／３は他の少数民族である。かってはほとんどがタイ族など少数民族であったが１９９６年の文化大革命の下放によって漢族が多く流入し、現在のような構成になったとのこと。

西双版納の意味は１２のパンナ（地域）、古く中国がこの地を１２の地域に分割して統治したことに由来する。景洪市はその首都で「日の出の町」の意味、１２万人が住んでいる。空港ではピンクのタイ族の民族衣装に身を包んだガイドの李さんの「おめでとうございます。」の挨拶に迎えられる。李さんはタイ族のお嬢さん、タイ族には本来の民族語の名前があるが、みな漢族風の名前を名乗ることになっているとのこと。この日はタイ暦１３６７年の新年である。タイ族の新年は水かけ祭りで始まる、この日は水かけ祭りの初日でもある。職場も学校もこの日から３日間はお休みで、街はなんとなしに華やいでいる。空は良く晴れとても暑い、到着時には既に２７Ｃ°、この日は最高は３５Ｃ°位まであがると

の予報であった。ここは昆明よりは南であると同時に海抜が６００ｍ程と１２００ｍ以上も低いからだとのことであった。

途中のレストランで辛さの強いタイ族風の昼食を取り、水かけ祭りの開会式の会場に向かう。路傍には黄色い袈裟の僧侶の集団がいくつか歩いている。小乗仏教を信ずるタイ族の男の子は皆、小学生になると寺に入り中学校を卒業するまでそこで過ごすのだそうだ。この間に民族の言葉や伝統を学ぶことになる、寺はもう一つの学校だ。川に架かる大橋のたもとでバスを降りる、川はアジアを代表する大河メコンの上流でこの地では瀾滄江と呼ばれている。

丁度午後１時、灼熱の太陽が照りつける。土手から河原へ続く道の両側には露店が隙間なく並び、その間の２ｍばかりの通路は祭りにやって来た人でごったがえしている。華やかで明るいピンクやシックな黒など様々な民族衣装の女性たちがあちこちで談笑し、笑顔が輝く。露店には黒く佃煮のように見える魚や肉の調理したもの、チマキのように大きな葉で包んだ食べ物、果物や野菜、飲み物、衣料品や玩具、竹で作られた高昇のミニチュア、はてはハンモックなどまで何でもある。８人は迷子にならないよう注意しながら人ごみをかき分け一列になって河原に下りていく。河原には日本のお花見の日の公園のように其処此処にシートを敷いて、家族連れなどのグループが楽しそうにご馳走をひろげ、男たちは飲んでいる。

「放高昇」の現場にて

ごったがえしている人ごみのむこうに竹で組み立てた高さ１５ｍほどのヤグラを見つける。「高昇の発射台だ」との声、皆の河原の石ころを踏む足にさらに力が入る。発射台に近づくと向うに本部のようなテントが見える、その手前５０ｍ位の所にロープが張られ立ち入り禁止となっている。警官が立って一般人の立ち入りを制止している。人ごみを抜けそのロープにたどり着こうとしたとその時、ドーン、ドーンという発射音と共に高昇が５発、煙をひいて打ちあがっていく。時計を見ると「放高昇」の定刻の１３時３０分であった。ロープ際からテントを見るがここでは遠すぎる。吉川団長がガイドの高さんを伴い、警備の警察官に近づき、３月に野外研から刊行したばかりの龍勢の報告書（「世界のバンブーロケット龍勢の系譜と起源」）を取り出し、巻頭に掲載している雲南の放高昇の写真を見せながら、「私たちは世界の竹ロケットを研究しているものだ。」と話し掛けると、意外にあっさり入って良いとの許可がでる。全員大急ぎでロープをくぐり、テントに向かう。テントでも龍勢の報告書を見せると、すぐに責任者の西双版納州民族宗教局長岩香宰氏に紹介される。吉川さんが報告書の概要と訪問の主旨を説明し、報告書を贈呈すると岩氏は大いに喜び、皆はテントの奥に招き入れられペットボ

（発射台から打ち上げられる高昇　吉川國男氏提供）

トルのミネラルウォーターを勧められ、さらには白酒（米の蒸留酒）で歓迎される。日差しの強い河原を歩いてきた一同にはテントの日陰は天国であった。テントの際にはたくさんの竹ロケットが積まれていた。ロケットの大きさは様々で、見えるものでも長さは３～４メートルのものから１０メートルほど、火薬筒の径は１２cm ぐらいはある。

（発射を待つテント際の高昇）

岩さんに放高昇について聞き取りを行った。以下はその概要。

１、　放高昇は高昇（竹ロケット、「ガンセン」と言う。岩さんは小生がメモに「高昇と書くと「高升」と直した。）を打ち上げること。タイ族とブラン族のみが行う。他の民族は行わない。両民族ともに小乗仏教を信仰するからであろう。

２．新年の行事はこの放高昇と女性を集めて相手を探す集まり（「歌垣」のようなもの）が二大イベントである。

３．高昇の打ち上げはこの一か月にわたり、各地の村々で順番に行われる。明後日にはガランバで上げる。何か所で打ち上げるかは数えられない。

４．一番大きいものは５０m位の長さがあって、５～６人で担ぐ。ロケットには２段のものも３段のものもある。

５．何時頃から始ったのか、起源については知らない。文献なども無い。自分が生まれた時にはやっていた。父や祖父の代にもあったと聞いている。遠い昔からあったと思う。文献などあれば、調べて後で送る。

６．打ち上げの目的は漢民族の爆竹と同じではないか。音で驚かす、魔除けである。

７．高昇を作る竹は１００種類もある竹の中で１種類のみである。

８．火薬は、昔は牛が糞を落とした土を集め、加熱して作った。芭蕉の葉で包んでおく？

９．高昇の現地語の名称

硝石	ケ
ロケットの矢柄	ハン（しっぽの意味）
ロケットの火薬筒	ボ$_{ウァ}$ン
ロケットの笛	ホー

高昇の打ち上げに先立って、まず団結踊り（「バンバタナンガン」）が行われる。銅の鉦やシンバル、象の足の形を模した木の胴に牛の皮の太鼓を男たちが打ち鳴らし、それに合わせて２０人ばかりのピンクの民族衣装の女性が踊りながらテントの前から発射台に向かって行く。発射台の近くで輪になって踊り、それが終わると高昇が数発打ち上げられる。何度か打ち上げが進むと、輿（「ギャオ」）が出てくる。誰が乗るのと聞くと、「一番えらいい人が乗るのだよ。」との答。見ていると、まず岩さんが皆に引かれて輿に乗せられる。輿を囲んで団結踊りがまた始る。団結踊りの行列が輿を囲み発射台へ行く。一頻り踊りが終

わると３～４発の高昇が打ち上げられる。次はこの地方の責任者。そして３番目には吉川さんが乗るように招かれる。本部の１人からタイ族の黄色い鉢巻を送られて、それを被り輿に乗り込み捧げられた白酒を飲み干し、団結踊りの行列に囲まれて河原の高昇の発射台へ進んで行った。そして、吉川さんのために特大の高昇が打ち上げられた。

今夜はこの地に滞在したら如何ですかとの誘いもいただいた、残念だがこれからの交流を約して１時間半ほどを和やかに楽しく過ごしたテントを後にした。河原はあいかわらず人でごった返している。ぎらぎらと日は照り付け､汗が吹き出る。まさに亜熱帯の夏の日差しである。写真の撮影に気をとられ皆から離れると、人ごみに紛れて迷子になりそうになる。民族衣装の人が多い。４度目の訪問になる吉川さんによれば以前の時より、人出も多く民族衣装の人の割合も多いとのことである。

ガイドの李嬢に、「民族衣装は良く着るのですか？」と訪ねると「普通の人は年に１回だけ、ただ私はガイドなので仕事着です。」と。迷子の出ないように気をつけながら河原を行くと龍船が川面を滑っている。先頭に龍の飾りを付け、３０人ほどで漕ぐ長い舟である。また、土手の上には闘鶏場もあった、もう今日の闘鶏は終わってしまったとのことであったが、黒い強そうな鶏を入れた籠が並び、多くの人が囲んでいた。暑さと雑踏と石ころの河原歩きに疲れ果てて、道沿いの休憩所に入り一服した。冷たいビールは１本４元（ほぼ７０円)、これで生き返った人も多かった。

（団結踊りを踊る民族衣装の女性たち）

（輿の行列が高昇の発射台へ行く）

（李嬢を囲んだ調査団、瀾滄江の河岸にて）

民族風情園

１６時２０分、水かけ祭りの会場を離れ、バスで１０分ほどの民族風情園に移る。ここ

にはジノー族、ハニ族、ラフ族、タイ族、ヤオ族、ブラン族の６つの少数民族の伝統的な住居が復元され、その各住居にはその民族出身の説明者が居て、それぞれの民族についていろいろ話をしてくれる。高床式住居あり、２階建てあり、平屋の平地住居もありで、家も民族衣装も様々であるが、説明役のお嬢さんは皆にこやかで、我々のたくさんの質問にも丁寧に答えてくれた。ほとんどの少数民族は米を作っているとのこと、概ね小柄で穏やかな表情をしている。古の日本人もこうではなかったかとの思いがわいてきた。

民族舞踊のレストラン

１８時３０分の夕食の予約時間が迫り、急いでバスに乗る。１０分ほどでタイ族の民族舞踊のレストランに着く。レストランには雲南省西双版納州州旅游局主任の常芹さんが待っていてくれた。吉川さんから龍勢の報告書を示しながら訪問の目的を説明し、常さんからは歓迎の言葉があり、参加者全員に西双版納を紹介するＤＶＤ「西双版納風情」を寄贈いただいた。常さんの話では高昇は製作されるとお寺に一度入れられ、その後はガジュマルや菩提樹の木の下で保管されるとのことであった。常さんに夕食を誘ったが、時間が無いとのことで、次回訪問時の再会を約して別れた。新年のお祭りの日、うら若いお嬢さんである常さんにはきっと別の約束があったのであろう。

屋外にあるレストランの舞台では華やかな彩りの民族衣装の娘さんが次々にあらわれ、民族音楽に合わせて民族舞踊が披露されていた。食卓には多くの皿が並んだ、辛い料理が中心で、冷たいビールに良く合って、暑さの一日を過ごしたメンバーは心地良く過ごしたが、途中からぬるいビールになってしまい、ちょっと不満の声があがった。午後７時を過ぎてもまだまだ明るい。ゆっくり食事をとり、もう日のとっぷり暮れた２０時過ぎ、レストランの近くにある工芸品マーケットをそぞろ歩く。ここはビルマ国境に近く、ビルマ人の翡翠などの宝石や大きな象の木彫などの工芸品を商う店や、当地の名産のお茶などを置く店が軒を連ねている。店をのぞくと店主か店員か店の中からしきりに誘う声がかかる。お正月のせいもあってか、２００ｍ以上も続く長いマーケット通りは現地の人たちでずいぶんと賑わっていた。

２１時近く、バスに戻り空港へ向かう。夜の瀾滄江大橋のたもとを行くと夜の河原へ多くの人が降りていく。ガイドの李さんからこれから河原では灯篭流しがあると聞く、ぜひ見たいものと心が動くが残念ながら時間が無い。車窓から賑わいを覗き込むと、「銀座」のネオンが目に入る。ガイドの高さんは「中国でも繁華街は銀座です。」との話、こんな所までも日本が移入されているのだ。２２時４０分、中国東方航空（ＭＵ５９０２便）にて景洪を発ち、１時間ばかりの飛行で昆明に帰る。ホテルに帰り着くともう、日付の換わる頃だった。この日も昨日に続いて長い一日だったが、西双版納では予期以上の収穫があり、皆が大満足の顔であった。

＜４月１４日＞

雲南省博物館

１４日木曜日、９時１５分にバスでホテルを出て昆明のメインストリート「北京路」を北行し、雲南省博物館へ向かう。平日の朝、自動車が溢れている。なにしろ昆明では１日

で４００台づつ自動車が増えているとのこと。運転は勇ましく、追い越しや割り込みなどが多く、乗っていてひやりとすることが度々あるが、事故は少ないとのことが不思議である。南の地方は現地の人がのんびりしていて競争社会ではないとの説明であったが、街には活気が感じられ、ウォルマートやカルフールの看板もあった。

１５分ほどで博物館に着く。建国１０周年を記念して１９５９年に設立された博物館で、現在の建物は当時のソ連の援助で１９６４年に建設された堂々としたものである。正面玄関前で王副主任が迎えてくれる。吉川さんから訪問の主旨を説明し、龍勢の報告書贈呈の簡単なセレモニーを行った。もう１人の王さんに館内をご案内いただいた。この館の収蔵品は１５万点、うち重要文化財が８００点、４つの展示室がある。

メインホールに恐竜の全身骨格がある。ここは恐竜の出土が多く、恐竜の故郷とも呼ばれているそうである。第１室は仏教関連で、主に７世紀から１０世紀頃までこの雲南に栄えた南詔国、その後１３世紀まで続いた大理国関連のものを中心に遺跡の写真や遺品が展示されている。第２室は青銅器の展示、青銅製の太鼓「銅鼓」が素晴らしい。中国南部からベトナム・タイ・ビルマ・ラオスなど東南アジア一帯に分布しているとのこと。紀元前７世紀頃、この雲南の地で炊事具である銅釜を伏せて打楽器に転じたことに起源するとの王さんの熱心な力を込めた説明とそれを証する多くの遺物の展示は感動的であり、圧倒されてしまった。

第３室は陶磁器の展示、普段は民族衣装が展示されているが、この時には特別展で陶磁器が展示されていた。民族衣装も見てみたかったが、並べられた景徳鎮などの官窯の磁器の美しさに皆の口からため息が洩れていた。第４室は擔當（担当）の書と絵であった。王さんの説明はいかにも研究者らしい真面目な語り口の判りやすいもので、質問にも一つ一つ丁寧に答えていただき感激の展観であった。どの展示も素晴らしくほんとうに時間を忘れてしまった。

元陽に向う

予定を１時間以上遅れ、１１時３０分博物館を後にし、いよいよ元陽に向う。ここからはバスで３８０ｋｍ、６時間の予定である。市内は渋滞しなかなか進まない、１時間ほどしてやっと高速道路に入り、最初のガソリンスタンドに立ち寄る。ガソリンスタンドの傍らにレストランがあるのを見つけ、ここで昼食とする。新しい建物で、床に野菜や肉、豆腐などいろいろな食材が置かれている。ガイドの高さんがそれを指差しながら料理を注文してくれる。昼食を済ませ、調理場を覗き、店の人たちと四方山話をして、またバスに乗る。ここは何処だろうと訪ねると「呈貢」とのこと、地図で見るとまだほとんど昆明市内であった。１３時４５分に出発。

片道３車線の高速道路を一路南に行く。大路であり渋滞こそ無いが行き交う車は少なくない。日本の高速道路と同じように緑に白字の案内板で地名が表示されている、その地名をホテルで購った地図と見比べながら周囲の景色を楽しむ。１４時４０分頃王添市を過ぎる。高速道路も将に整備が始まったところなのであろうか、日本にあるような休憩所やドライブインはまったく無い。トイレ休憩がとれるのはガソリンスタンドのみである。トイレはどこも所謂「中国式」、個室に扉が無かったり、あったとしても上下が大きく開いた開

放式である。そのガソリンスタンドもとても少ない。建設中のガソリンスタンドをたくさん見ることができる、これからはどんどん発展していくのであろう。

高速道路が山に入る、山が赤い、赤土の山である。この辺りは岩石が少ない、しかし山には背の低い貧弱な木が疎らにあるだけ、荒れ山のように見える。中島さんが道際の所々に竹を見つけて、あの高昇を作る竹だと説明してくれる。その竹は一つの根っこから何本も幹がのびているあまり見ない竹だ。その赤土を削って畑が拓かれている。多くは新しい畑だろうか、周りの山と土と同じ赤い色である。その一角には古くから耕されているのだろうか、他より土が黒くなっている畑が混じる。

町を過ぎ一山を越えていくと次の町が現れる。王添市から１時間程行き、通海に入る。ガイドブックによれば、ここには回族やモンゴル族の村がある。車窓から独特の丸屋根と塔のあるイスラムのモスクらしきものが見える。すぐに反対側に前庭に馬の彫刻を飾ったモンゴル人の集会所がある。ここのモンゴル人は元のフビライの大遠征に従った兵士たちの末裔であるという。通海の入り口でガソリンスタンドに入る。スタンドの前を水牛の引く車がのんびりと行く。そんな風景を楽しんでいるが運転手の李さんがなかなか出てこない。憤然と建物から出てきた李さんに聞くと給油をしたいのだが、店は売り惜しみをして売らないと言うのだそうだ。中東原油の値上がりがこんな所まで響いているとは。結局、この街で捜し歩いた６個所目のガソリンスタンドでやっと２０リッターほどを補給して、１６時頃に町を過ぎる。

さらに１時間、建水を過ぎる。１７時を過ぎてもまだ日は高い、風はすこし涼しくなってきた。18時近く、鶏街を過ぎると高速道路は終わり、急にガタガタ道になる。少しばかり行くと道は良くなり、ちょっとほっとする。さらに３０分程行くと个旧（こきゅう）の市街地に入る。ここは山の中にある大きな街、中国有数の埋蔵量をもつ錫の鉱山の街である。車窓から大きな煙突が見える、心なしか空が濁っているようだ。雲南の鉄道はここの錫をベトナムに運び出すために敷かれたと高さんは説明してくれる。

个旧のある山地を下ってさらに４０分ほど行くと車窓に棚田が見えてきた。急傾斜の山ごと棚田である。日が傾き、仕事を終えた農民が鍬を肩に家路を歩く。水牛を曳いたおばあさんが帰って行く、５～６頭の水牛を追って道の真ん中を行く人もいる。やがて前方が開け、大きな滔々とした流れが目に入ってくる。ベトナムのハノイの近くでトンキン湾に注ぐ大河、紅河本流である。ここまで来るともうベトナム国境も近い。紅河に沿ってしばらく行き、橋を渡ると元陽の新市街「南沙」である。もう１９時３０分、薄暗くなってきた。ここは標高７００ｍ、ホテルのある旧市街「新街」は標高１７００ｍ、一気に山道を１０００ｍ登るのだ。やがて真っ暗になる。街灯もなく周囲の景色もまったく見えない九十九折れをさらに１時間、やっと目的のホテルに到着する。昆明から昼食を含めて９時間の長いバスの旅だった。運転手の李さんにご苦労を感謝してバスを降りる。

日本を出る前には、元陽まで行くと満足な設備のホテルは無いのではないかと想像し、覚悟とある程度の準備をしてきたが、ここ「雲梯大酒店」は近年建てられたホテルのようで、三ツ星ではあるが洋式の設備を備え、安心して心地よく眠ることができた。

＜４月１５日＞

元陽の朝

（朝の元陽市街）

１５日金曜日、朝起きるとホテルは大きな山の斜面に建っている。直ぐ下には山の上とは思えない町並みが続いている、その向うは朝霧が流れていて遠くは良く見えない。山の朝は風が涼しい。階段の多い街へ出ると路地には果物や野菜、肉などを売る露店が並び、暖かそうなウドンを出す店が地元の人で賑わっている。雲南では朝食は米で作ったウドン「米線」を食べる人が多く、昆明では勤め人のほとんどは家では朝食をとらず、オフィスの近くの店で米線を食べるとのこと。ここ元陽でも外食のウドンの店が多いようである。

店の脇のバケツにゴルフボールのような貝が入っている、この山奥で何だろうかと思うと、「大きなタニシだ！」との声があがる。竹篭を背負う民族衣装のおばあさん、子供をおぶうお母さんがゆっくりと歩いて行く。女性の多くは民族衣装である。想像した雲南のイメージそのものである。丸顔で背が低く昔の日本人に良く似ている。

この地は行政的には雲南省紅河ハニ族イ族自治州元陽県となる。イ族は雲南を中心としたこの地域に古くから住む民族で現在、雲南省には４５０万人が住むという。ハニ族はもともとは遊牧民で、１６００年前に内モンゴルからこの地に移り住んだ人たちの末裔だそうで、今は雲南のこの地域にのみ住んでいるとのことである。

ハニ族菁口民俗村

８時４５分、ホテルにて朝食を済ませ、勝村の壩達（パーダ）の棚田へ向かう。バスは霧の中、山道を進む。５月から１１月までは雨季、１１月から翌５月までは乾季であるが、棚田に水が入るこの時期は連日のように霧が出るそうである。霧が激しいので予定を変更し、まず箐口村のハニ族民俗村に入ることとし、道際にバスを止める。ここから村まで１５分ほどの下り坂である。他に歩く人もない。霧が風に流れ、日が射し込むと行く道の右側の崖下に棚田が広がる、皆から歓声があがる。

ガイドの高さんはもっと規模の大きいと所がたくさんありますよと制するが、皆カメラを向けて一斉にシャッターを切る。霧の流れる棚田の風景にはるばる来た雲南の棚田だとの感を深める。この辺りの棚田は土坡のものが多く、ところどころに石積もある。段高は様々だが、傾斜の強い所では１．５ｍ～２ｍ、緩やかなところでは１ｍ～１．５ｍ程度に見える。１枚の面積も様々であるが、ほんの２～３ｍ^{2}程、人一人やっと入れるような狭いものもある。

しばらく行くと右側は山地になり、左側の道際から緩い傾斜の棚田が広がる、その道際で３人の男たちが焚火をしている。焚火には底の深い鍋がかけられている。傍らの竹で編んだちゃぶ台のような小さなテーブルには、丼と湯呑が４つ、木の升の中に山盛りの生米

とがのっている。さらにタバコの箱が２～３箱。生米の中に紙幣が小さく折られて突き刺されている。脇に載せたポリ袋の中には種籾もある。丼の中は赤い血のようである。朝食の準備でもしているのかと足を止めて話かける。ちょうど通りかかった我がグループの数人でいろいろ尋ねると、焚火にかけられた鍋の湯の中には丸ごとの鶏とアヒル、湯呑の中は朝霧であるという。鍋の中に米を入れて煮込んで食べるとのこと。男の１人は先生と呼ばれている。他の２人は家族であり、家で良くないことがあったので先生（祈祷師）に来てもらい「幽霊、出て行け」と祈るのだそうだ。ジーパンの上に民族衣装を羽織った先生は酒で清め、ハニ語の呪文を唱えだす、祝詞のように朗々と語る。語りながら、朝霧からとった水の入った一つの湯呑に酒を入れ、丼の中の血、鶏とアヒルのものであろう、と米を入れ、最後に種籾を入れ、苗代と思われる道際の棚田にまいた。この田は一連の棚田の一番上、水が流れるトップの田ではないかとは中島さんの観測である。５分ほどで儀式は終わり、３人は焚火を消し、荷物をまとめて坂を下って帰って行く、中島さんがポリ袋の種籾を少し分けてもらう。モミは粳だろか糯だろうか、インディカだろうかジャパニカだろうか、赤米はあるのか興味は尽きない。並んで坂を下りて行くと１人が食事に来ないかと誘ってくれた。ぜひとも行ってみたいと思うが、先の予定が動かせない。誠に残念であった。

（「先生」と祈る人）

坂を下りるとハニ族の村があった。日干しレンガで作られた家々が路地の両側に並ぶ。小路を水牛の親子を追って竹篭を背にしたおばあさんが行く。民俗村として観光地になっているので、民族衣装の子供たちにカメラを向けると「１元！」とせびられる。家々には入り口に小さな店を出し、女性たちが観光客を待っているものもある。だが、観光客は少なく、ゆったりとした時間が流れていて、まだまだ牧歌的である。

小さな土産物屋の横丁を入ると、脇の小さな部屋で娘さんが一人ご飯を食べていた。赤米だった。娘さんの食べている茶碗からひとかけら分けてもらってそこにいた４～５

（ハニ族の民族村にて　吉川氏提供）

人で食べてみた。炊いた米であっさりした感じであった。

村を抜けると広場があり、その向うにハニ族文化物館があった。ハニ族が使う農具などの民具や祭祀の写真、民族衣装などの展示がある。それらを見ていると館長の盧朝貴さんが見えた。村の村長さんのような風貌のゆったりとした大人の風で、親切にいろいろ説明してくれる。春の農耕の始まる前に村中で集まって行う長街宴についてのお話など興味深いものであった。皆で記念撮影をすることになると、盧さんは民族衣装に着替えて現れ、吉川さんの分も持ってきてくれた。館長とハニ族の衣装を着た吉川さんを囲んで皆で記念撮影をした。

来た道を登って、バスへ向かう。皆が行った後で、中島さんが棚田を見上げる構図の写真を写したいとのことで急な崖を下りて行く。坂道に留まって見ていると最後の一歩を滑って棚田にはまったらしい。大丈夫だろうかと声をかけていると、白人の老夫婦がゆっくりと登ってきた。「ニイハオ」と声をかけてきたので、「日本から来た。」と英語で答えると、紳士も英語で自分はフランス人だと言い、ここの風景は素晴らしいと何度も何度も景観を絶賛した。思い出してみれば同宿の白人のグループもフランス語だった。昆明のホテルでも白人の家族連れやグループが皆フランス語を話していた。ガイドの高さんによると、かっては中央の中国人は雲南に入るのにいったんベトナムのハノイの方に出て、川伝いに来たと言う。昨日通った个旧の錫もベトナムを経て出て行った。雲南にひかれた最初の鉄道は昆明とベトナムを結ぶものだったとのこと。雲南はベトナムを通じ、さらにフランスにつながっていたのだとの感を深くした。

（棚田の農夫）

中島さんはズボンを泥に汚していたが無事に登ってきた。良い写真がとれたことであろう。上段の棚田の一画では農夫が１人、水牛に鋤を曳かせて田をおこしていた。当初はここは１時間程の見学の予定であったが、既に２時間半を超えて、もうお昼近くになってしまった。壩達の棚田には午後から行くこととし、いったん昼食に街へ帰ることになった。

壩達（パーダ）、孟品（モンピン）の棚田

午後、再び壩達に向かった。山道を登っていくと霧が晴れ、日が射してきた。バスを降り、歩いて５分ほどの高台の展望台に到着したのは１４時頃。日の出の棚田の名所とかでカメラマンの三脚が立錐の余地も無く並ぶこともあるというこの展望台もこ

（壩達（パーダ）の棚田）

の日は他に誰もいない。雄大な眺めである。眼下は深い谷、反対側の斜面は見渡す限り一面の棚田である。谷の底からは霧が湧き上がり全部は見えないが、谷底から山頂まで見事な棚田が続いている。多くの田には水が入っている。一部ではすでに田植えが終わっているようだ。棚田の堤の間には所々に水路が走っている。良く見ると上の方の大きな区画の水の張ってある所は溜池のようにも見える。しばらくは景色に見とれていた。

さらにバスで孟品（「もう」は「孟」へんに「力」、モンピン）へ向かう。展望台に立って向うを望むが、霧が深く良く見えない、しばらくするとすーっと霧が流れて、ぼんやり薄く景色が見えてくる。ここにもまた棚田が雄大に広がっている。規模の大きさに歓声をあげるが、言葉にならない。深い谷を挟んだ向う側は一面の棚田である。谷の底には流れが見える。そこから霧に霞んだ山頂まで棚田が続いている。棚田の堤が山の傾斜に沿って幾重にも連なり、なんとも美しい。山頂近くに集落が見える。「保山」と呼ぶ村だと言う。あんな村に行ってみたいものだ。

展望台には民族衣装のイ族の女性たちがたくさん集まっている。大人たちはお土産を売る。刺繍をほどこした衣装や手芸品、雲南茶などである。また小学生ぐらいの年回りの女の子が２０人ほど寄ってきて「踊りを踊るからお金を」と声をかけてくる。男の子はいない、男の子は学校へ行っているのではないかとのこと。久保さんが日本から持ってきた袋菓子をだして子供たちにプレゼントしようとすると、大人たちも混じって争うように手を出すので、大騒ぎになってしまった。多くは丸顔で小柄で日本人と良く似ている。雲南茶の袋を１０元で売る娘さんは､穏やかな物腰で落ち着いている。教育もあるようで、日本の街角で見かけても慎み深い良家のお嬢さんと見える風情である。久保さんは「息子の嫁に連れて帰りたい。」とすっかり気に入った様子。お茶はたくさん売れた。

（展望台で踊る子供たち　吉川氏提供）

しばらく子供たちと楽しく遊んで、４時過ぎに展望台を出る。バスは山の斜面を行く、新しく拓かれた観光道路であろうか、一部は棚田を切って道ができている。道際の谷側の棚田の中には、土が乾き耕作が放棄されているものが見える。堤や底にひびが入り崩れてかかっている。道路の建設によって上から水路が絶たれたのであろうか。かっては棚田見学するには長時間歩かなければならなかったと聞いた。今はバスで容易く登れる。世界遺産に申請中であるとのことであり、今後は観光地化が進みさらに開発が進んでいくであろう。ここはどのように変わっていくのであろうか。帰り道のバスの中で、いろいろ考えてしまった。

その晩は、街の招待所のレストランでガイドの高さん、運転手の李さんと一緒に夕食を囲んだ。お互いに自己紹介し、これまでの旅のことなどを語り合った。田中さんの「山を保全して、水を徹底的に使っている。棚田が造り易い地質である。土は風化した柔らかい土である。最初は石を使わずに土坡の棚田をつくり、風化して壊れると石を入れて補修し

たのではないだろうか。石を入れているところは新しいと思われる、補修の跡がいくつか見えた。」との棚田を見ての総括のお話がとても印象に残った。

招待所からホテルへの道に山岸さんと加藤さんが屋台を見つけたとの話、有志で出かけてみる。街は街灯も無く暗かったが、朝の露店の場所近くに屋台が何店か並んでいる。覗くと何処もお客さんで賑わっている。二人の娘さんがやっている店に入った。炉ばた焼きのような店で、気に入ったものを注文すると目の前で焼いてくれる。何だかわからないものが串刺しになっていろいろ並んでいる。先客は若者が二人、加藤さんの通訳でいろいろ話してみる。おとなしい気の良い若者である。白酒を注文する。この白酒は麦から作った蒸留酒である。強い。近くの串を「これは何？」と聞くと「アヒルの舌。」とのこと、トライする。焼きあがったそれは辛くてよく味が判らなかった。しばらく６人で飲んで食べて７６元（１０００円ほど）であった。

＜４月１６日＞

昆明への帰路

翌１６日土曜日、８時３０分にホテルを発ち、昆明に帰るバスに乗る。霧の中を新街から南沙へと一気に下る。「一つの山に四季がある。」と言うそうだ。山頂から下るほど気候が変化し、段々と暖かくなる。雲南省の面積は３９万ｍ^{2}と日本全土よりやや広いが、その９４％が山地だそうだ。茶畑が見える。１時間あまりで南沙に至る。また紅河に出会う、河畔で給油しさらに進む。しばらく川筋に沿って走り、やがて紅河本流に別れ、支流の一つに沿って山に向かう。なだらかな登り道に入ると左右に棚田が拡がる。車窓から棚田の中で民族衣装の女性が並んでいるのが目に入る。バスを止めて下りてみる。田植えが行われている。女性たちは皆、民族衣装で働いている。数人で並んで苗を植えている田がここあそこに見える。何段か上の田ではご夫婦であろうか、男が水牛に鋤を曳かせて田を耕し、傍らで女が一人で植えている。機械の影はまったく無い。機械の音の無い農作業はわれわれの心をほっと和ませるなつかしさがある。しばらくはそのなんとものどかな情景に見とれていた。

（田植をする民族衣装の夫婦）

１１時ごろには錫の町个旧を抜け、鶏街で来た道と　分れ別の道をさらに北行する。開遠市に至り、町中の明るい大きなレストランで昼食を取る。今日も良く晴れて暑い、店の寒暖計をみると３４～３５°を示していた。１３時３０分にレストランを出発、さらに行く。１５時過ぎ、弥勒の町に入る。タバコとワインの街だそうだ。大きなタバコ工場が道際に建っている。街のはずれの小高い山の中腹には大きな「布袋さま」の像が立っている。弥勒の名の由来だそうだ。

石林風景区

しばらくして昆明市石林県との表示が見えると、今までの赤土の風景の中に白い石が混じるようになる。石の多い土地が耕され畑となっている所も多く見える。進むほどに石が多くなる。立っている石が増える。赤のカーペットの中に白石が立つ景色は人工の庭のようである。やがて高速道路を降りて、石林風景区に着く。１６時２０分になっていた。石灰岩が森林のように起立する不思議な景観である。名高い景勝地であり、多くの観光客が来訪し国際色豊かで活気に溢れている。ガイドブックや絵葉書の売り子、お土産売り、カメラを手にした記念写真屋も次々に寄ってくる。民族衣装を着たガイドがあちらこちらに客待ちしている。イ族の一支族であるサニ人だそうだ。広大な地域であるが、その中心部を１時間ばかり散策する。

かっては石の周囲は畑として耕されていたそうだが、今はすっかり公園として整備され緑の芝生になっている。緑の芝も美しいがあの赤の土の方が石林が引き立ち、一層見ごたえのある景観になるではないかと思えた。散策後、またバスで昆明に向かう。ここから昆明までは高速道路で１時間２０分程、１９時には昆明のホテルに着く。最初に泊った錦華大酒店である。この雲南行での最後の夕食はホテル内のレストラン、旅の成功と皆の無事を祝って雲南ワインで乾杯し昆明名物の過橋米線を食べた。

＜４月１７日＞

帰国

最終日の１７日日曜日、８時２５分にホテルを出て、空港に向かう。１０分ほどで空港に着く。都合８５０ｋｍの長いバスの旅であった。昆明から元陽まですべてのコースを運転してくれた李さんやガイドの高さんと別れて空港のゲートをくぐる。チェックインカウンターの預かり荷物を運ぶベルトコンベアーシステムの故障でしばらく待たされ、便の遅れを心配したが、中国南方航空ＣＺ３４７８便は定刻９時４５分に出発し広州へ飛ぶ。機中はほぼ満席である。この旅で利用した中国の国内便はほぼすべて満席であったが、便は大きな遅れも出さず運行されていた。この国の今の力、経済の勢いを示しているのだろうか。眼下には昨日までバスで巡った赤い大地が広がっていた。１１時２０分広州白雲空港に着陸。空港内のレストランにて飲茶を楽しむ。乗り換えたＪＡＬ６０４便はやや遅れて１５時３０分に離陸、成田へ向かう。飛行は順調で２０時１０分、成田空港へ着陸。再会を約して解散した。

＜雑感＞

この計画のお話を伺って、年度始めの何かと忙しい時期であったがこれはチャンス、今回思い切って行かないと当分行けないだろうなとの思いにかられ、強引に休暇をとって出かけた旅であった。わずか６日間のあっという間の短い旅であったが、今振り返っても見ても行って良かったと強く感じている。同行者に恵まれて、またお天気にも恵まれ楽しく旅を過ごせたことは勿論であるが、若い頃から雲南に一度は行ってみたいと思っていた念願を少しは果たせたことも大きい。

学生時代に縄紋文化に興味を持ち、貝塚や集落跡の発掘に参加することが多かった。そ

してその頃、縄紋時代中期に八ヶ岳山麓に展開した大集落遺跡群の存在を背景に諏訪の藤森栄一さんが唱えた縄紋農耕論に強く共感するものを感じていた。そんな論議を背景に佐々木高明さんが「稲作以前」や「照葉樹林文化の道」などで「日本列島には水田稲作農耕に先んじて照葉樹林焼畑農耕文化が存在していたのではないか。水田稲作を取り入れた後の日本文化にもその要素が多く残され、これが日本文化の源流の大きな一つとなっている。その照葉樹林文化のセンター『東亜半月弧』の中心が、メコン川や長江・サルウィン川の上流にあたる雲南である。今も雲南の少数民族の生活にはその文化要素が多く残されている。」と語られたように記憶している。また渡部忠世さんなどにより、この雲南―アッサムが稲・稲作の生まれたところであるとも論じられていた。

これらを読んで、雲南と雲南の少数民族の文化は日本人と日本文化の起源に密接に関連するとの強い印象が残っている。稲作の雲南起源説は最近では河姆渡遺跡など長江流域での新しい発見が相次ぎ、再検討が進んでいるようであるが、その頃から、雲南は一度は行って見たい場所であった。当時から３０年以上の歳月が過ぎ、雲南の人も文化も大きく変わってしまったのだろうなとは思っていたが、今回行ってみると確かに都市部は大きく変貌し、街は東京と同じようであったが、西双版納や元陽では民族衣装の人々が歩き、照葉樹林文化として論じられた日本と共通する様々な文化要素が多く残っていて、若い頃に書物でみた雲南がまだそこにあったことが単純にうれしく感じられた。

中国では今、沿岸部の発展に続いて内陸部の開発に力が入っている。その片鱗はこの旅の中でもあちこちで見られた。雲南もそこの人々の生活も今後は大きく変わっていくことは避けられないであろう。もちろん、そこに住む人たちの幸せが第一であり、第三者がその変化を妨げることはできないが、それぞれの民族が長年にわたって連綿と伝えてきた伝統文化は何らかの形でぜひ将来へ伝えて欲しいと強く願う思いが残っている。（2005.5）